

IsisからAxelまで

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): ヴィリエ・ド・リラダン, イシス, モルガーヌ, エレン, アクセル, 住居と性格, 象徴主義芸術 キーワード (En): 作成者: 中島, 廣子 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2005230

Title	Isis から Axel まで
Author	中島, 廣子
Citation	人文研究. 35 卷 1 号, p.15-32.
Issue Date	1983
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Isis から *Axël* まで

中 島 廣 子

I

Villiers de l'Isle-Adam の小説、*Isis* における作中人物像、それも主として女主人公の Tullia Fabriana をめぐって、これまでさまざまな角度から考察してきた。¹⁾ そこで本論では、同じ作家の手になる他の作品の登場人物達との比較を通じ、Tullia という存在のみならず、*Isis* という小説そのものが Villiers の諸作品中でいかなる位置をしめ、いかなる意義をもつものを明らかにしてゆきたいと思うものである。その手はじめに、今までふれた事のなかった、主だった戯曲をとりあげてみようと考えた。

まず最初に、*Isis* 第二部創作中の時期に、すでに作家が執筆にとりかかっていたと推定される²⁾、戯曲の *Morgane* についてみてゆこう。これも *Isis* 同様、イタリアを舞台に話が展開されるもので、高貴な身分の美貌の末亡人が、シシリー王家の王位継承権をめぐる政争にかかわり、恋人とともに王座をうかがうといった筋立てのもので、恋と政治的野心とがからみあった悲劇の形式をとった作品である。こうしたストーリーの点からみれば、*Morgane* は *Isis* の内容をほとんどそのまま引きつぎ、いっそう具体的に書かれた作品であるかのような印象をうけるのである。*Isis* の小説中で暗示されていたながらも、続編が発表されずに終わってしまったため、その筋書がいかなるものであったかについて、Raitt のたてたような仮説³⁾ も見当らぬわけではないが、これとてあくまで推測の域を出ぬものでしかない。だがむしろ登場人物像などからみると、小説と戯曲という両作品の形式の相違をこえて、かなり深いつながりを感じさせる要素があるようである。

Morgane という女性、年の頃27才前後、「ひいでた額」に、髪は「ブロンドの巻毛」で、Tullia 同様の、思わず見ほれるような美しい容姿を誇る貴婦人と記されており、「もしもそなたが、金色の花で飾った杖を持ち、髪

につたをからませたなら、かの美わしの牧神ニンフかと思まごうばかり…」(p.63)⁴⁾ というせりふにもあるように、古代の彫刻を思わせる面立ちであろうと想像される。しかしこの戯曲では、他の作品に比べて、容貌に関する描写が非常に少なく、その反面、服装などのこまかい指定がなされているのが見立つ。豪華な衣裳や身につけたあまたの宝石など、色彩にいたるまでくわしく書かれており、それから察しても、華麗で優雅な雰囲気をもった社交界の花とでもいうべき存在であろう。それ以外に女主人公の特徴として、「声」についての記述が、*Isis* における場合と等しく印象的である。

「低くこもったそなたの声音、つい聞きほれてしまうその声を耳にすると、星明りのもと、森の空地で、燃えさかる炎に百合とつぼらんの花をさしのべ、犠牲にささげるバッカスの巫女たちが打ち鳴らす太鼓の響きさながら、はるか遠くから我を呼ぶかに！…」(p.63)

この表現からみる限り、恐らく Tullia の声と Morgane の声は、同質のものであるとみなしてよかろう。何故なら、Tullia に話しかけられた d'Anthas は、この世ならぬどこか遠くの世界から聞えてくる、神秘的な声に思われたからであった。

この声、この柔らかなコントラルトの響きは、たしか初めて耳にしたものではなかった。(…) それははるか遠く、想像も及ばぬ昔の事であったように思えたのだ。呼べども木だまも返らぬ沈黙、恐ろしいほど深い沈黙に襲われた国の只中で、その年代すら思いつかぬ忘却の淵に沈める時代の事であったと。この声を聞いたのは、そんな虚無のさなかの世界だったという気がした。(p.136)

冷たくもまた妖しい抑揚を帯びた声で語られたこの言葉が、ヴィルヘルムの心をとらえてしまい、彼はくるめきを覚え、蒼ざめるほどだった。(p.224)⁵⁾

さらに *Isis* においては、ヒロインの性格が、Forsiani 公の人物評や、Tullia 自身のモノローグの中でうかがい知る事ができたが、Morgane についてはどのような描写がなされているのだろうか。ト書や他の登場人物達のせりふにしばしば出てくる表現をあげてみると «impassible, imperturbable, froidement» とか、あるいは «Je suis celle qui ne se trouble jamais» (p.30) などの例をはじめとして、いずれも冷ややかで物に動ぜぬ女主人公の態度をあらわしたものが多く目につくのである。宮廷で

の彼女のライバルであるしたたかな妖婦 Lady Hamilton をして、「私達は二人とも、他人には測りがたい恐しいところがございましてね」(p.155)と言わしめるほどの女性で、華やかで優雅な宮廷人としての生活の陰に、人知れず、ヨーロッパ諸国との外交上のかけひきを行い、暗謀をめぐらし、ナポリ王国の支配権を掌中におさめんとする、二面性を持った人物である事も示されている。

「あなた様がどんなお方か、一目で見抜きましたよ。(…)野心と気力に満ちた傲然たる魂をそなえたお方であるという事がわかりました。それにあなた様を駆りたててやまぬ権力への、あの大いなる夢をお持ちだという事も。」(…)

「あなた様の生きて来られたあとには、あまりに恐ろしい秘密がいろいろあって、御自身でもおぼえておいでにならぬとみえますな。」(p.39)

加えて、その「高邁なる魂と不屈の勇氣」(p.168)には、政敵からも一目おかれるほどである。しかもおのが野心の成就のためとあらば、「戦い」をも避けようとはせず、その陣頭指揮をとるような女大夫である。そして、陣地の前に「処刑台」を置かせたり、自己の秘密をかぎつけた人間には、「ナポリに帰り次第、あなたにはどんな酷い死に方をしていただいたものかと、考えておりますの」(p.40)と平然と言ってのける、激しく残酷な気性に特徴がある。また、ドレスの帯にピストルをはさみ、戦いにそなえるべく、ナポリに近い Luz の居域には地図やコンパスが置かれ、周到に王位をうかがうあたりは、Isis のケースとあまりにも共通点があり、この戯曲が Isis の続編であるかのような錯覚をおこすほどである。

次いで Morgane の恋人についてはどうであろうか。この二人の出会いもまさしく宿命的なもので、「雷」のとどろく中、とある山中の砦を訪れたヒロインの耳に、地下牢より響いてくる囚れの身の青年貴族 Sergius d'Albamah の歌声が届き、その声にひきつけられた事から、二人の間に恋が芽ばえる結果となる。そこで彼女は、かねてよりいっていた王位継承権をめぐる企てに、この男性をおしたてて争おうと心にきめるのである。

「これぞ天のさだめというもの。(…)あのお方は、私が期待した以上の、非のうちどころのないお人。」(p.27)

「あの方は、王杖でも持つかのように、鎖の切れはしを手になさり、ほろほろに裂けたお召物には、緋の衣のつやが感じられましたもの。(…)あの方こそ、正しく私が探し求めていた大いなる剣、青銅の額。そう思えてきてよ。」(p.28)

「ぐずぐずしてはいられないわ。なぜって、私の見たところ、あの方こそ王者にふさわしいお人柄。どうか運命がまっとうされますように!…」(p.30)

このような Morgane の独白は、Tullia が d'Anthas に思いをはせる場面で、やはりモノローグの形でうかがわれた表現と、大差ないものである。しかも Sergius 自身のせりふの中にも、Tullia が d'Anthas にいだいたイメージと重りあうところがある。それは囚われの身の彼が、「おのが子より、若さと太陽をとりあげ、見捨ててしまった母なる祖国」(p.23) となげくくだりで、この人物が本来、「若さ」と「太陽」で象徴されるべき存在だという事が読みとれよう。他にも、「この私もまた、栄光と権力と不滅を望んだ身でした」(p.64) とヒロインに語るシーンなどでも、d'Anthas に託した Tullia の願望がそのままの形で示されているといえる。

これ以外にも、主人公達の運命が手相によって暗示される手法も、*Isis* において用いられたケースと同様である。それを Sergius は、占師に変装した Laday Hamilton より告げられるのだが、彼が王者になるべき器の人物ながらも、非運のうちに死んでいった祖先と同じ運命をたどる身だと言うのだ。

このようにストーリーのうえでも、また表現の手法上も、この戯曲が *Isis* の延上長にある作品で、その内容をより具体的かつ視覚的にあらわしたという感がある。そして、Tullia と d'Anthas との出会いの季節について、象徴的な意味が読みとりうると先に述べたが、ここでも再び問題になるかと思われる。Morgane と Sergius が事を起すのが、まさに「春」の訪れを告げるカーニバルのおりと設定されているからである。しかし、この点については、*Elën* や *Axël* などの他の作品とあわせて考えてみるべきで、後にもふれる事とする。

ただし、ここで、*Isis* と異った点も同時にあげておかねばならぬであろう。それは、主人公と対立するような役割にある人物についてである。*Isis* の中では Lord Henry Seymour が、Tullia の政敵になるらしいと暗示さ

れてはいるが、そのあと登場する事もなく、未完のままになっている。二人が対決する事により、小説の面白さも増すはずであるため、この点では多いに不満の残るものであった。それにひきかえ、*Morgane* では、ヒロインの宿敵として暗躍する妖艶でしたたかな女性、Lady Emma-Lyonna Harte Hamilton を登場させ、はっきりとした形でからませ、しかも劇中でヒロインに負けぬほどの役割を与えているのである。⁶⁾

イギリス生れの彼女は、貧しい生い立ちながら、持ち前の美貌を武器に社交界に出て、おのが目的のためには手段を選ばぬやり方で、ナポリ王妃の信任を得るまでの地位にのぼり、その陰で多くの有能な人々をおとし入れて犠牲にして来ているのだった。まさに妖婦と呼ぶにふさわしい悪魔的な人物である。彼女もまた暗いイメージはあるものの、「それこそ女神のようでありました！ヒュギエアの女神です」(p.36)といわれ、輝やける肢体に、豊かなブロンドの髪をもち、才気にあふれ、女主人公 Morgane の魅力にも十分匹敵しうるほど強い個性を与えられている。事実、作品中でも、「モルガーヌ、あなたって、手ごわいライバルだわ」(p.96)と彼女が言うところがある。気高い魂を持っているか否かという点をのぞけば、この二人は非常によく似たイメージの女性なのである。こうして同等の力を持つ者同志が、ぶつかり合い火花をちらす場面をえがく時こそ、作者の筆のさえがみられるものである。さらに Tullia は、指環の中に毒を隠し持っていて、それで命を絶とうとしかける場面があったが、ここでは Lady Hamilton が Morgane に毒を持ってゆき、それによってヒロインが自らの誇りを保ちつつ死をむかえようとする箇所が最後にある。このように、*Isis* においては、女主人公の心理描写の密度の濃さに特徴があったが、反面、人物構成はかなり単純なものであった。ところがここでは、むしろ登場人物同志のからみに力点がおかれ、おのずとその構成も複雑になってきているのが注目される。が、いずれにしても、これらの両作品の類似性は驚くばかりで、創作年代から考えても、*Isis* の続編を書き続ける事よりは、戯曲の執筆のほうに作者の関心が移ってきたのではないかと想像されるのである。

II

さて次に、やはり *Isis* 出版直後より創作にとりかかっていたとされている、戯曲の *Elën* についてはどうであろうか。⁷⁾ これは、上記の二作品がい

ずれも南国イタリアを舞台にしていたのとは逆に、ドイツのドレスデンでの話である。Samuel という学生達のリーダー的存在の青年が、その町で、ローマからきた西インド諸島出身の謎の美女、Elèn に誘われるままに彼女の館へおもむき、そこで数日をともに過した後、阿片を吸わされて、気づかぬ間に余所へ運び出されてしまう。その一方で Elèn は、恋仇の Madame de Walzburg のために毒殺され、青年が阿片の眠りからさめた時、彼女の葬送の列が目の前を通り、その死を知るという筋だてになっている。

ここでも又、ヒロインはこの世のものとは思えぬ美しさと魅力に満ちた女性である。

「彼女の美貌、植民地生れの女性特有の、輝くばかりの色の白さ、気品に満ちた目鼻立ち、茶色い髪をつややかさに、ひきつけられないはずはありませんでした。歩むあとからは、金色のつる草の匂いがたちのぼり、その身体は大草原のかんばしい香りにゆあみしたかのようにでした…あゝ！あの麗わしくも不吉なる顔だち！」(p.215)

「輝けるエレン」と讃えられ、その目の中に「理想」を見たとか、「おごりかなその顔の清らかさ！…一そしてけがれを知らぬその額、気高くやさしい魂」(p.278)を持った女だなどと Samuel は形容するのだが、それは阿片の夢の中で見た姿にしかすぎず、正体は浮かれ女だったのだ。とはいえ、やはりここでも、きわだった容姿の美しさのみならず、性格的にも Tullia の特性の一面を引きついでいるようなところがある。⁸⁾ それは特に巻頭にかかげられた詩の中によく表わされている。

まこと私は、沈黙がふさわしい無情の女、
生きる喜びも知らぬまま、冷たく空しい日々を送り、
崇高な胸の高鳴りも、天に拒まれて、
(…)

あなたの目に映る私は、北の国々さながら、
半年は光あふれ、半年は闇に沈む身。
(…)

この私は、訪れる人も絶えた墓場にも似て…(pp.201—2)

その他、本文中のせりふにも、「どう考えても、私って人を愛せない女なのね」(p.254) などとヒロイン自身がつぶやく部分をはじめとして、Elèn

のイメージは、官能に身をまかせつつも、彼女もまた孤独に生きる冷やかなるタイプの女性で、絶えずつきまとう倦怠感に悩まされ、《*mélancolie des séraphins*》(p.278)をたたえた人物である。

「何という、ぬきがたい物憂さかしら！…何という苦い思いなのでしょう！ わずかつかの間でも、それを忘れて過せないとは！…」(p. 246)

「たとえ生れつき沈みがちな私でも、許して下さいね。私は、今は絶えてしまったある家系の出なのです。そしてあなたを長い間お待ちしていましたの。孤独のうちにあれこれと思い悩んだせいか、すっかり快活さをなくしてしまいました。あなたと御一緒に、無邪気さをなくしたように。」(pp.248—9)

このような心理状態は、Tullia が深い倦怠感からぬけ出そうとして、理想の男性の出現を待ったのと同じパターンがみられる。そして、学生仲間から《*demi-dieu*》と呼ばれる Samuel と出会うのだが、青年との愛の日々にも、結局は憂愁はいやされずに死んでゆく事となる。まさに Samuel が阿片に酔って垣間見た、夢幻劇の中であらわれたような女性であり、「太陽のもとに、そんな女など存在するものか。ありえない事さ。」(pp. 276—7)と青年が友人からからかわれるような、実在感の乏しいヒロイン像である。

それ故、Samuel を誘い入れた彼女の部屋は、地上の楽園かと見まごうばかりに豪華と贅美をつくしたものである。絹の壁布をはりめぐらし、床には高価な絨緞をしきつめ、異国の花々が咲き乱れ、見事な黒壇の円テーブルや、黄金の花器や七宝の盃などが置かれており、まるで Tullia のサロンの中にいるかのように、この二人の女性の居場所の雰囲気一致している。Tullia にとって、サロンが、冷たい知的空間に対する「官能」性を象徴するような場所であった事を思い起せば、なまめかしい女性の持つ官能的側面を強調したような、Elèn という人物にとっては、当然の舞台装置であろう。ただ、フィレンツェの Tullia の館と異なり、北の国では夢の中の《*les pays de la mort*》(p.268)にしか存在しないもののような印象を与え、事実、作中のせりふの中に、Beaudelaire の「旅へのいざない」から引用したと思われる箇所も指摘しうるのである。そして Tullia や Morgane が、理想の男性とめぐり合うのが春のはじめであったのに対して、ここでは秋になっており、後にくるのは自然が「死」の姿をとる冬でしかない。したがって、先に

あげた二人は、「愛」という点では思いをとげるのに、Elënのみは満たされる事なく死をむかえ、よみがえりを告げる春の訪れがないのである。Samuel とともに死ぬわけではなく、彼の言うように「僕達は、もう一つの別なる死を通りぬけ、もう一つの太陽を目ざして進む」(p.227)という事が実現されずに終る。ただその死に際の姿には、Villiers 好みのヒロイン達に特有の、誇り高き女性の一面を与えられている。

「私は自らの王国に君臨したまま、女王として死んでゆくのです。」(p.261)

「お前は、勝ちほこったまま死んでいったのだ」(p.280)

しかし、この戯曲では、Elën 以外の登場人物像があまり個性豊かなものでなく、Samuel ですら細かいところまで描きこまれておらず、いささか印象がうすいというきらいがある。これは、夢の中の出来事のような、淡いトーンで全体を統一したかったせいなのだろうか。いずれにせよ、どちらかと言えば Morgane が、現実の社交界で華麗な存在として活躍する、「陽性」のタイプであるのに対して、Elën はその反対に、「陰」のイメージを持つわけで、二人を合わせれば、ちょうど Tullia のようになるのではないか。⁹⁾ そして、*Morgane* と *Elën* の両作品が、二つともそろって戯曲の形式をとり、しかもきわめて近い年代に構想が練られた事などを思いあわせれば、単なる偶然として片づけてよいものだろうかとも思うのである。

III

さてここで、Villiers の戯曲の中でも最も高い評価をうけている *Axël* について検討せねばなるまい。これは、ドイツの「黒い森」の奥深く、Auërsperg の城に住む、天涯孤独の身の Axël という青年を主人公にした作品である。彼と同じく、すでに両親をなくした Sara de Maupers は、かつて先祖が所有していた修道院で育てられ成長したが、その書庫に残された古い謎の書付けの秘密を解き明かし、Axël の城に莫大な金銀財宝が隠されている事を知り、神に身を捧げる事を拒み、修道院をぬけ出し、Axël のもとにたどりつく。偶然にも時を同じくして、青年も又、その財宝のありかを知り、そこで二人は出会うのである。そして、二人は傷つけあいながらも、互の美しさや魅力に心をひかれ、恋におち入るが、この地上には「絶対」の愛

なるものは求めても得られぬと悟り、二人して「死」の世界へと旅立つのである。この作品こそ、初期に書かれた *Isis* と並んで、最も神秘的主義的色彩の濃い作品であり、Villiers が生涯を通じて、その方面への強い関心を持ち続けていた事実が、よくうかがえるものである。

まず最初に登場する主要な人物は、Sara である。「背が高く、復活祭の蠟燭を思わせる娘」(p.21)¹⁰⁾ の彼女も、Villiers 好みのヒロインの数々の特徴をそなえている。その第一は、「美しすぎて、恐ろしいほどのサラの美貌」(p.18)とか「稲妻の走る森のような美しさ」(p.231)というように、息をのむほど美しい姿かたちである。その容貌は、「神秘的な美しさをたたえた顔立ち」(p.10)、「娘の神々しい顔」(p.231)と形容され、一種おかしがたい気品と、謎めいたところのある顔つきであろうと想像される。修道院の礼拝堂の祭壇の前に進み出る姿は、

モワレ模様長い白の寛衣を^{チュニツク}まとい(…) オレンジの花をあみこんだ豊かな髪が、黒く波うちながら衣の上にはらりと落ちかかるのであった。その顔は石に彫られた像を思わせる。(p.34)

「あゝ、私の唇が、そなたの白き足に口づけし、燃えあがらん事を。そこに形を刻むべき、大理石にもかえようぞ。」(p.250)

「あゝ、『永遠の別れ』の彫像にも似て、墓所の真中に、喪服を身にまとい、微笑みながら、宝石に飾られた姿で、そなたは現れる定めにあったのだ。漆黒の髪にふちどられて、闇の中に咲く理想の百合さながらに。」(p.240)

といった表現から、彫刻的な美をたたえている事がうかがわれ、さらにそれに加えて、「そなたという存在の花にもたとうべき、神々しいまでのその口は」(p.241)とあり、清らかな白い乙女の肉体を白百合に、赤い唇を恐らくはバラの花にたとえた例など、Alicia や Tullia たちと同じ外見をそなえているのである。

第二に、声についても、Axël に愛を語る最後の場面のト書きに、「澄んだ甘いかすかな声で、低いくらいの声」(p.237)だという指定があり、それを Axël は「鳩のなくような声」(p.242)と感じている。だがその声は、「おごそかで不思議な」(p.246)調子を帯びてきたりもする。これは恐らく、

Tullia たちの声と同質の、神秘的な響きを持つものであろう。第三には、一風変った Sara の性格である。幕開きの場面で、修道院長が副司教を相手に、その件で長々と議論するくだりがある。ヒロインは、かたくなに自己のうちにとじこもり、胸のひめ事を院長にすら明かそうとしない。したがって《coeur fermé, sauvage enfant (p.21); ténébreuse orpheline (p.29)》だとみなされ、ひどく強情なところのある冷やかな態度の娘《comme acier, trop froidement exemplaire (p.21)》だと評している。

「彼女のうちには、きまじめで冷やかな、得体の知れぬ気質がうかがえるように存じます。」(p.26)

そして、それ以上に院長が恐れをいदैているのは、Sara のずばぬけた「才智」で、異常なほど学問に打ちこむところがあるのだと語る。すなわち、ただでさえ俗界から隔った、禁欲的な修道院に暮していながら、古い珍しい書物のぎっしりつまった「書庫」の中で、人目をさけて、多くの時間をついやし、何かの研究をうちこんでいるのである。そこは数百年前、薔薇十字の一团に占領されていた事があり、彼等が残していった不思議な文字の記された古文書が多数保管されている。Sara の「学問」への執着ぶりは異常なほどで、それらの文書を片っぱしから読みあさり、しかもそれと同じ文字で書かれた謎の書きつけの意味を解読しえたため、Axël の城へと旅立つ事になるのである。すなわち、彼女はそれらによって、己の運命を決定する何かを読みとったからだ。

「あの娘は、知性という恐ろしいものを、神様から授ったようでございます。」
(p.29)

ちょうどこれは、Tullia が例の「書庫」にひきこもって、自己の宿命の何たるかを解き明そうと努めたおりの姿そのまま、冷ややかなる硬質のイメージの処女としてえがかれているのである。¹¹⁾

そして第四には、美貌の下に隠した内なる「残酷」さであろう。Sara も又、帯の中に短刀とピストルを隠し持ち、自らの行く手をはばもうとする者には、たとえ副司教といえども容赦せぬ非情さをみせており、Axël の如き屈強なる男性にも敢然といどみかかって傷を負わせるような、激しく攻撃的な一面を持つ。「私ほど陰鬱な乙女も他におりますまい」(p.237) と言うと

ころなど、Tullia そのままの面影がある。加えて Sara も、Tullia たち同様に、祖先より伝えられたエメラルドの指環をはめ、その宝石の下に毒を入れており、Axël とともにそれをあおって死を迎えるのである。又、他にも、「ベール」にこめられた象徴的意味をめぐって、この二人のヒロインの類似性を指摘している研究者がいる。

«le Voile mystérieux de Sara, (...) représente le voile initiatique des mystères d'Isis (...).»¹²⁾

イシスの女神のようにベールをかぶった彼女達の、真の素顔を知った者にとっては、これらのヒロインはいずれも «inoubliable» な存在となってしまうのである。

さて Sara は、一年中で最も夜の長い、「闇」に沈む季節である真冬の、それもクリスマスの夜に、「不毛」の処女性の象徴と思われる修道院をぬけ出して、新しい「生」、すなわち謎の文書に記されてあった財宝という「夢」のありかを求めて、主人公の住む城にむかう。そして万物の再生の季節である、「春」の訪れを告げる「春雷」のとどろく中、それもちょうど「復活祭」の前夜に、Axël という男性との運命的な出会いをとげ、はじめて「官能」にめざめる。そして二人して、永遠に変らぬ愛、不滅の「生」の世界である死を選びとる事となる。以上のような、まことに象徴的な構成をとっているこの作品は、イシス信仰特有の思想に貫かれた戯曲であると言えよう。そこでヒロインが、不滅の「生」をともにする相手となる、Axël という主人公についてみてゆかねばならない。だがその際、特に注目すべきなのは、この作品のタイトルそのものである。たとえば本稿でとりあげた作品は、ヒロインを思わせる女神の名からとった *Isis*、あるいはヒロイン自身の名が表題をも兼ねている *Morgane* や *Elën* といったように、女性の名である事が多い。さらに他に、*Claire Lenoir* とか *L'Ève future* などの主要作品の表題をも考えあわせれば、ここで Axël という男性が主人公になり、その名をタイトルに用いたという点は興味深いものがある。そして、それはタイトルのみにとどまらず、作品の人物描写についても、男性の登場人物中で最もくわしい描かれ方をしている。似たような傾向をもつこれらの作品を創作する際に、多くの場合、作者は、ヒロイン像に力点をおいて書いたと思われるふしがあるが、恐らく Axël に至って、作中で男女の主人公の占めるウエイ

トが逆転したのであろう。

主人公の第一の特徴は、言うまでもなく、理想的な男性美をたたえている点にある。

年の頃は、二十三、四。相当の長身で、見事な男性美。優雅で均整のとれた筋骨たくましい体つきから、人並みすぐれた体力のほどがしのばれる。白く輝くばかりのその顔は、黒褐色の波うつ長髪にひきたってみえ、物思わし気なところが、表情に神秘的なかけを与えている。(p.114)

「伯爵様は、たくましいお体によく似合う黒い服をお召しになり、威厳のある、しかも卒直な態度をお示しになられ、(…)若獅子の如き勇者の風貌がおありで、そのお目には、血筋が感じられます。」(p.68)

「あいつは背が高く、まことに見ばえのする男だ。なれなれしいところがなく、一種気品のようなものを感じさせるし…宮廷にのぼってれば、さぞや人目をひいただろうに。」(p.90)

そんな人もうらやむほどの美男に生れつきながら、うら若い身で、普通の若者の楽しみなどには目もくれず、まことに禁欲的な生活を送っている。森の奥深く、ひっそりとたつ城の中の彼の部屋には、錬金術やカバラ、サバトなどに関する古い書物をはじめとして、錬金術に用いられる科学器具とか、占星術用の天球儀や、その他薬草類などが所狭しと置かれてある。そして「幾夜となく、勉強用のあかりのもとで、ひたすら古写本にむきあって、(ジャンヌス)博士とともに徹夜の御研究」(p.71)という様子である。ここでも Tullia や Sara と等しく、「学問」への傾倒ぶりが第二の特性となっている。そして、まる何日も、ほとんど食事を口にせぬような事もあり、*«jeûne»* という行為に象徴される禁欲ぶりこそ、修道院の中で育った Sara という清らかな乙女にふさわしい存在となるのである。だが、それがため、Axël の部屋は、Tullia の館の書庫や、Sara が住んでいた修道院の書庫と同じく、冷たい雰囲気満ちた所と設定されるのは、当然の結果であろう。従って、世俗的な欲望や快樂の渦まく中に生きている、Axël の従兄にあたる Commandeur に言わせれば、青年の居場所は、「ここでは妙に変わった空気を吸わされる」(p.91) とこぼすほどの、「こごえ そうなほど寒く」(p.64) で、まことに風変りなものと設定されている。ここでも、Villiers

の作品によくみられる、主人公の住居と登場人物の性格の一致という要素が指摘できよう。

第三に、さらにこの視点をひろげて、城主たる Axël の住む城や、それを取りまく深い森についても考えてみる必要が生じよう。これはすでに E. Wilson らの研究によってもとりあげられているとおり、非常に重要な意味をもつものである。たとえば、一見平和そのものの森の中にひっそりと建っている城なのに、ひと度事が起れば、たちまちその様相を変えてしまうからである。

「そなたは、百里の彼方まで闇におおわれた、世にもまれなこの『森』の中にいる身なのだ。そこには二万の森林看守が住んでいて、危険なカービン銃を備え持つ彼等は、代々我が家に忠義をつくしてきた血筋の、元兵士たちなのだ。私はその真中の、すでに三度の攻囲をもはねつけた、年ふりた石造りの館にあって、森を見張っている。(…)私の所へだれかが不意にやってこようとしても、一人であろうがなかろうが、たちまち私の元へ知らされる。誰が近づいてこようとも、その数に応じて警戒体制がしかれ、監視されつづけるだろう。」(pp.170—1)

以上の記述からもうかがわれるように、Axël の城は、難攻不落の砦と化し、さらに主人の命令にしか従わぬ獐猛な軍用犬を飼っており、守りの堅さを誇っている。これは主人公の《impénétrable》、《impassible》《indéfinissable》という、他人を容易に寄せつけず、冷やかで不可解な性格の、見事なまでの反映である。優雅なたたずまいを見せていた Tullia の館といえども、本質的には共通の特徴をそなえており、二人とも、古くこけむし、きづたのからんだ、眠ったような石造りの建物に住む身である。ところがその中には、一方は、まさに夢のようなきらめく金銀財宝がうずもれているわけであり、豪奢の極みとでも呼ぶべき背景の中で、Sara とめぐり合い、「官能」に目ざめる。もう一方は、d'Anthas なる青年を迎え入れた、贅美をつくしたサロンが用意されていたはずである。

しかし、Tullia が d'Anthas をうけ入れるまで、倦怠につきまとわれ、悶々と日々を送っていたように、Axël もまた、「沈黙のみを好んで」森の中にこもっているのだが、何か満されぬ思いでいる。

「インドの話によくある領主よろしく、おのが財宝のありかも知らぬまま、こんな城壁にかこまれて、倦み疲れ、朽ち果ててしまわねばならぬのか。森の獣を追っては、

絶望感を粉わしていなければならぬのか！」(p.191)

《Le Monde occulte》の場面では、こんな主人公の心理の葛藤が、Maitre Janus 相手に語られているのであり、そこにも *Isis* での Tullia のモノローグを思わせる部分が多々ある。そして、このような心理描写は、Sara の場合よりもはるかに念入りで微妙なところまで描かれており、これほど共通するところがあれば、Axël という存在が、Tullia を男性にしたような人物と考えてもよいのではないかと思えてくるのである。

さて以上にあげたように、Axël と Sara という、二人の主要な登場人物の描写のあり方を比較してみた場合、先に述べたように、他の作品とは異って、ヒロインよりは Axël のほうにやや重きがおかれている事は事実だが、この二人の男女の組合せほど、互いのバランスのとれたものも少ないのである。Axël の声についてはさほど明確には書かれていないが、他の特徴など、いちいちが驚くほど相似かよっていたり、呼応しあうようになっている。しかも Axël と Sara とも孤児で、両方の家系がはからずも同じ「紋章」まで有しているのである。そして、その二人の出会いの際の衣装の色も「黒」で、一方はヴェールをつけ、一方はマントをはおろうとし、¹³⁾ まさにうり二つの兄妹か、一人の人間の分身のような印象をうけてしまう。現実には作品中で、Sara が Axël にむかって、《O mon frère Axël》(p.244) と語りかける部分があるが、ここでは、恋する者同志の甘い呼びかけという、表面上の意味を越えた、重要な暗示が読みとれるような気がする。*Isis* の中で d'Anthas は、父の公爵の生れかわりのようなイメージを与えられており、近親相姦的ニュアンスが間接的に表現されていたのに比して、この戯曲でははるかに明確かつ大胆に示されるようになってきている。¹⁴⁾ また同時にそれは、己を愛するという、ナルシスの側面をもあわせもつ事は言うまでもない。

さらに興味深い点は、Axël は愛の対象として、己の似姿たる Sara を見出したが、他方、別なる自己の分身と闘わねばならぬ運命にあった。おのが神聖な「夢」の世界に踏みこみ、これを凌辱せんとした Commandeur は、青年とは従兄弟同志の間柄であり、二人の精神のありようは正反対なのに、「銀貨のように蒼白い顔」(p.66) をはじめとして、外見は皮肉にもそっくりである。

カスパー・ドール・ドール・ドール (…) 大貴族の風貌あり。四十三才くらい。黒ラジャの短い外套をまとった旅のいでたち。所作は優雅そのもの。長身。(p.86)

二人の肉づきがあらわになった。(アクセル・) ドール・ドール・ドール伯は、しなやかで闘技者のように筋肉が盛りあがっている。一方、コマンドゥールは、たくましく敏捷で、強靱そうである。(p.181)

従って、二人が対決する《Le Monde tragique》は、「夢」を守り、そこに生きんとする自我と、それをあざ笑い、つきくずそうとするもう一つの自我との対決の場の色彩を帯びている。すなわち、己自身とむき合う悲劇をさしているはずである。

その上、Axël が自己の運命の謎にせまろうとする段階で、論争せねばならぬ人物が存在する。それは、彼に難解な秘術などの様々の学問を手ほどきしてくれた、Maitre Janus である。

長軀で、見事に均整がとれている。整った目鼻だちの顔、(…) 全身からにじみ出る峻厳な美しさと、輝くような蒼白い顔色。(…) 黒褐色の髪は波うち、ところどころ、かすかに銀色がまじり (…)。衣装は、制服か何かのような黒服 (pp.184—5)

と、ト書に指定され、古代オリエントの彫像を思わせる異国風の顔立ちながらも、体格や容貌など、Axël に似たところがある。そして、二人の精神については、Commandeur とのケースとは逆に、ほとんど共通した傾向を持っているはずである。であるから、この師もやはり、Axël の分身的な役割をになっているはずで、《Le Monde occulte》でも、主人公の自我の分裂状態がうかがえるように思う。¹⁵⁾

IV

さて本論においては、主だった戯曲の登場人物の描写をめぐって、比較検討をすすめてきたわけであったが、共通して読みとりうる最大の特徴は、大まかな点では、いずれもほとんど同一のパターンの繰返しか、あるいはその変形といったところにある。そしてそれらの原型が、何らかの点で、Isis における登場人物、ことに Tullia の人物像に求めうる事であろう。実際 Tullia と他のヒロイン達、あるいは d'Anthas と他の男性の主要人物達との関連性についてふれた研究者はあった。その例としてすでに引用しておい

た以外にも、次のような意見がある。

Si Tullia Fabriana, par ses traits essentiels, se rattache à Morgane et annonce Sara, le comte Strally d'Anthas représente, lui, la jeunesse des héros de Villiers de l'Isle-Adam. Sergius et Axël sont mûris par l'expérience, puisés pour l'un dans la douleur, pour l'autre dans la méditation.¹⁶⁾

Tullia est la première en date des amazones du domaine fabuleux créé par Villiers, l'ainée d'Elën, de Morgane et de Sara,(...).¹⁷⁾

とは言え、そのいずれもが当をえた指摘でありながらも、具体的にくわしく例証して得た結論でないのが残念に思われる。ただ一人 Raitt のみは、テーマ的な観点より、*Isis* と他の作品との関連性について論じているが、これは本論にとって、一つの支えとなろう。¹⁸⁾

さらにここで、*Isis* より *Axël* に至る登場人物の系譜をたどった結果、もう一つの重要な問題点が浮びあがってきたわけである。それは *Isis* 創作当時は、ほとんど Tullia の描写にのみ作者の力が注がれ、他の人物にまで十分筆が及んでいなかったというきらいがあるが、それ以降、年を経るにつれ、次第に登場人物の分化が進んできているという事実である。しかしそれは、あくまでも同一ないしは類似のイメージをもつ者同志が、愛し合ったり憎み合ったりするという図式であり、これが *Axël* において最も端的な形であらわれているとみなせよう。しかしながら、これは象徴主義芸術によく見うけられる特徴の一つではないか。たとえば絵画の構図や詩のテーマとして、鏡、水その他、ナルシス的な素材が好んで用いられている点¹⁹⁾ からも容易にうかがえよう。このように、幾重にも反復してゆく耽美的世界における残酷さを描かせれば、ぬきんでた才能を発揮するのが Villiers であり、彼自身、確実に symboliste への道を歩んでいた事が読みとれるのではなからうか。そして戯曲のみならず、その他の作品との関係においても、この図式があてはまるものかどうかを検討すべきであろう。

《注》

1) 人文研究第三二巻第10分冊末尾に、「以下続く」と記したにもかかわらず、本稿に

- においては、対象が拡大したため、タイトルを変更したが、内容的にはあくまで前号までの研究の延長である。
- 2) 書簡集その他の研究により、1865年頃と推定されよう。またこの作品は、後に書き改められ、*Le Prétendant* となる。
 - 3) A.Raitt: *Villiers de l'Isle-Adam et le mouvement symboliste*, 1965 Corti, pp.212—3.
 - 4) *Morgane—Elën*, OEuvres complètes de Villiers de l'Isle-Adam Tome VIII, 1927 Mercure de France をテキストとして使用。頁数は引用文の後に記す。以下同様。なお本全集版によるテキストはすべて O. C. と略号をもって記す。
 - 5) *Isis*, O.C. Tome IX, 1928. 頁数は引用文の後に記す。以下同様。
 - 6) *Pages posthumes*, O.C. Tome XI, 1931. に収録された作品 *Lady Hamilton* でも、再び登場する人物。
 - 7) 書簡集によれば、1862年頃には、すでにその形跡ありと認められよう。
 - 8) «L'héroïne rappelle Tullia Fabriana.» (E. de Rougemont: *Villiers de l'Isle-Adam*, 1910 Mercure de France, pp.118—9)
 - 9) «Ainsi, dans la galerie des héroïnes de Villiers de l'Isle - Adam, Tullia Fabriana tient la main de Morgane, comme Morgane tient la main d'Elën, (...) Au monde strictement passionnel d'Elën, Morgane ajoute le monde tragique que l'ambition féconde.» (M. Daireaux: *Villiers de l'Isle-Adam, l'Homme et l'œuvre*, 1936 Desclée de Brouwer, p.298)
 - 10) *Axël*, O.C. Tome IV, 1923. 頁数は引用文の後に記す。以下同様。
 - 11) «(...) dans l'appétit de savoir qui la (=Sara) rapproche de l'héroïne d'*Isis*, (...)» (J.-H. Bornecque: *Villiers de l'Isle-Adam, Créateur et Visionnaire*, 1974 Nizet p.129)
 - 12) Ibid., p.142 13) Ibid., p.142 参照のこと。
 - 14) Bornecque の見解はそこまで及んではおらず, «(...) de ce Wilhelm et de cette Tullia d'*Isis* qui cherchent déjà confusément à incarner Axël et Sara: (...)» (Ibid., 120) とあるのみである。
 - 15) ついでにつけ加えれば、この Maître Janus と Tullia の類似点について、論じた研究もあるのである。(Ibid., p.36)
 - 16) M.Daireaux: *Villiers de l'Isle-Adam, l'Homme et l'œuvre*, p.307
 - 17) A.Lebois: *Villiers de l'Isle-Adam, révérateur du Verbe*, 1952 Messeiller, p.47
 - 18) 注3)を参照のこと。
 - 19) «(...) cet attrait que sur le Symbolisme exerça le mythe de Narcisse.» (A. Thibaudet: *La Poésie de Stéphane Mallarmé*, 1926 Gallimard, p.390)

その他、「反復と差異」と題する本江邦夫氏の論本（「ベルギー象徴派展」のカタログに収録）を参照のこと。